



相原在住の美大生がアートのまちづくり

「ゆるい」感じで集まれる場所、きっかけは玉のよこやまから。

ドリンク一杯300円から。なんともリーズナブルなお値段でカフェを開いているのは、地元の大学に通う学生たち。相原の駅前ではいま、slow boat というカフェと mintaka というセレクトショップ(ギャラリー)が昨年秋と今年の春にあいついでオープンし、相原に新しい空気をもたらしています。今回、このふたつのお店の運営にかかわっている学生さんたちにお話を聞いてきました。



JR 横浜線相原駅前のカフェ slow boat

玉のよこやまがきっかけで動き出した学生たち

このお店はふたつとも、玉のよこやまがきっかけとなって始まりました。slow boat は昨年の玉のよこやま開催に合わせてオープンしたカフェで、これまでずっと黒字で経営しています。もともと、相原で友達同士集まる場所がほしいねと話していた学生数人に、地元のカフェ店主が「なら、やってみれば？」のひとことでプロジェクトが始まりました。

mintaka は、玉のよこやまのイベントのひとつだった空家での美大生のアートスペースが好評で、「このまま続けたら？」という地元のひとの声を受けて、ギャラリーのかたちでオープンすることが決定。東京造形大学の学生さんたちが中心となって、春休みをいっぱい使って開店準備。晴れて今年の4月にオープンの運びとなりました。



駅前から徒歩5分、なだらかな坂の途中の
ギャラリー mintaka

今回インタビューに応じてくれた学生さんたちは、みなさん町田市の外から美大進学のために相原にやってきました。ある学生さんは、相原ののどかな風景と東京のイメージのギャップが大きかった、と苦笑交じりに相原にやってきた当初のことを振り返ります。美大生は課題に追われ、自主制作もし、いそがしい学生生活を送っています。そんななかれらが、なぜ相原という土地に目を向け、自分たちのスペースとしてだけでなく地元の人にも来てもらいたいと、お店を作るようになったのか。そのきっかけとしては玉のよこやまと、それにまつわる地元のひとたちとの交流に触発された部分が大きいようでした(店内の様子とインタビューの模様を次ページにてレポートします)。

第72号目次

相原在住の美大生がアートのまちづくり	1
ふるさとづくり50年・私の幻燈譜(七)	渋谷 謙三 4
『エコポイントと生態学』	桜井 朋広 7
事務局だより・編集後記	8

「変化しながら続いてほしい、相原のいろんな人が居合わせてひろがる場所を」

—slow boat 取材

お話をしてくれたのは代表の小島丈二さんと高橋杏里さんのおふたり。ともに多摩美術大学に籍を置く4年生です。slow boat 店内でこのカフェが始まったきっかけを話していただきました。

学生の自分たちだけではなくて地域の人とも一緒に居合わせる場所がほしい。小島さんは同じ下宿に住む友人同士で、もともとよくこんな思いつきを話していたそうです。ちなみに小島さんは神奈川の逗子から、高橋さんは静岡市から大学進学のために相原にやってきました。美大生は大学の課題のほかにも自主制作活動などで忙しいわけですが、そんなかれらが「大学だけだと地域の人と接触する場所がない」（小島さん）ということで、相原に住んでいるひとたちに目を向けるようなきっかけは何だったのでしょうか。

「自分たちでも自覚してるんですけど、美大生って変なやつらだと思われているだろうと思って、だから相原の大人の人たちにも」。さらに小島さんはこう続けます。「でもアパートで課題制作をしていると、大家さんが何してるの？とふらっとやってきて声をかけてくれて、なら電ノコを貸してあげるよとか、荷物を運びたいから車を出してよ、とか運転役を頼むことで、じつは閉じこもりがちな自分たちを外に連れ出してくれてたような感じで」。小島さんは、次第に自分たちも地域の人に声をかけてもらえたらなあ、という気持ちが芽生えていったと言います。そのことを件の大家さんにカフェの構想としてなんとなく話したところ、玉のよこやまにあわせて実現してみたらどうか背中を押されたそうです。それからあとは地元の人たちの協力を受け、スタッフ一丸となって今のslow boat を作り上げて、現在黒字の快進撃を続けています。

お客さんとの思いがけない会話がうまれて

このお店にやってくるお客さんは、オープンが夕方からということもあり、意外にもサラリーマンが目立つそう。「学生と話すのが好きだ」と言ってやってくる人。たとえばデザイン系の仕事をしているお客さんが偶然デザイン学科の学生と居合わせて、「デザインとは何ぞや」という熱い議論が繰り広げられることもあるそうです。また、ひとりでふらっと入ったお客さんが店内にあるピアノでさらっと何曲か弾いて帰るといった時もあり、最近はその流れでジャズセッションのイベントも開かれたとのこと。たしかに、自然発生的なイベントが生まれそうな空気が店内に流れていました。

slow boat café は学生スタッフによる経営という方針で、今年度卒業を控える小島さんと高橋さんは下の学年のスタッフに引き継ぎをしている最中です。高橋さんは言います。「今後の経営についてとか、お店の存続に不安がないわけじゃありません。だけどそれ以上に、私たちの次を引き継ぐスタッフがどんどんコンセプトを変えていってお店そのものがどんどん変わっていったらいいと。皆がこのカフェを好きで続けていってくれたら。そういう意味では今後ここがどんなお店に変わっていくのかな、という期待と不安のほうが強いです。」

地元の人たちとの距離感は変わりましたか？という問いかけにたいして、「それはもう」と高橋さんは目を細めて語ってくれました。「紅茶を飲みに来た女性のお客さんがお孫さんの話をして、帰るときに『これ、おじいさんと食べるつもりだったんだけど食べて。今度おじいさんと一緒に来ます』って私たちに鯛焼きをくれたりとか。今までは話すことができなかった方とそんなお話をすることで、あたたかさを感じるような。相原にはいろんな人がいてそれぞれに生活があって、そのなかで私も暮らしているんだ、と。ここで話することができるのは貴重なことのような気がします。」今はめったに会えない祖父母のことを思い出したり…こういうことは小さいことかもしれませんが、とも付け加えてくれました。5年後や10年後、相原を訪れる姿を想像しますか、という問いに、おあたりとも生き生きとした声で、「そうですね。こういう場所やギャラリーが増えて、自分の作品を展示しに来たりとか」と答えてくれました。

slow boat cafe ブログ URL <http://cafe-slowboat.blogspot.com/>



「散歩途中のセレクトショップ」—mintaka 取材

slow boat 取材のあと、今年 4 月にオープンしたセレクトショップ mintaka にもお邪魔しました。こちらの代表は和田寛世さん、造形大学テキスタイル科の 4 年生です。

和田さんによればもともと mintaka の前身は、玉のよこやまのイベント期間中に空き家を使った造形大テキスタイル専攻の学生のアートスペースとのこと。イベント終了後、これは続けたらいいのではないかという地元の人の要望にこたえるかたちで、新しくセレクトショップに生まれ変わることになりました。新規オープンにさいして和田さんが代表者となり、スタッフ一丸となってほとんど mintaka オープンの準備に春休みを費やしたそうです。

ふらっと立ち寄ってくれるお客さんたち

お客さんとしてやってくるのはおもに地元の奥さんや年配のご夫婦など。散歩の途中で、「何やってくるの？」とお店にやってくるそうです。確かに mintaka は空いた民家をお洒落に改装してゆるやかな坂道の入口なげなくオープンしています。そぞろ歩きをしている人の興味をひくたらずまいです。



当初「大学生ばかりが来ショップになってしまったらどうしよう」という不安がスタッフの間にあったそうですが、これはうれしい誤算だったようです。「学生だけが勝手に盛り上がっている場所じゃなくて、地域の人と楽しく関われる場所がもうちょっと増えていけば。〔相原は〕ほんとうに変わってくると思います」。和田さんそうは言います。

和田さんが相原に愛着を持ってかかわるようになったきっかけは、玉のよこやまのイベントに参加したときにさかのぼります。和田さんは玉のよこやまでは道開き記念イベントの「天晴れ神輿」の担ぎ手としても参加していました。そのときにお祭りの喧騒の中で相原の人たちとやりとり、たとえばおじさんたちから「お茶でも飲んでいくか？」といった声をかけられて、お茶を御馳走になったことなどが楽しくてならなかったと振り返ります。

「相原という土地にはもうめちゃくちゃ愛着がありますね」。相原に来たときもこの自然は大歓迎だったんですけど…と快活に笑う和田さん。だからこそ「相原に溶けこんだお店にしたい」と考え、経営を軌道に乗せ、相原に根づいて今後も長く続けることができるようにお店の基盤づくりにじっくり取り組んでいます。今年の春、mintaka のスタッフを募集したさいも、造形大の学生ばかりでなく、堺市民センターでも説明会を開くなどして学生に限定せず、広くスタッフを探したそうです。

今後はより幅広いジャンルの作家さんの作品を公募やスカウトで集めてショップの内容を充実させ、それとともにアートに関心を普段持たないひとでも興味をひくような展示法を考えたいと、和田さんは mintaka の今後の展望を語ってくれました。

mintaka ブログ URL <http://mintaka-diary.blogspot.com/>

おわりに——相原のふたつのお店を訪問して

今回取材した相原の美大生たちはみなさん他県の出身です。そんなかれらが相原への愛着を胸にお店を切り盛りしているのは、相原の人たちとの思いがけない交流がもつ楽しさの故ということが、インタビューを通じてとてもよくわかりました。ふたつのお店は町田経済新聞にも取り上げられています。ぜひご覧ください。

slow boat cafe について <http://machida.keizai.biz/headline/329/>

mintaka について <http://machida.keizai.biz/headline/408/>

(取材・紙面構成：編集担当補佐 向谷有加)



スタッフのみなさん。左から和田寛世さん、望月美緒さん、狩野佑真さん。

渋谷 謙三

前々回からの幻燈譜を読み返してみても、反省点が二つ見つかった。ひとつは、新しい町田市をつくる動きをお伝えするのに、章節のタイトルを「新庁舎建設への準備」として話を進めてきたことだ。「新庁舎」は、新しい都市・町田市を創り上げるための拠点機能のひとつであり、大事な事務所であることは間違いないが、庁舎を新しくしたからと言って、即、希望に輝く新都市が出来上がるわけでもない。今回からは直接内容を示すタイトルに変えるように改めた。もう一つは、「幻燈譜」と言うからには、目に映るものが中心にならなくてはいけないのに、私の「所有写真」がかなり役に立つと思っていたが、いざ、採り出してみると色あせていて印刷すると更に見え難くなるものが多くて困っている。文字が多いが、お許しいただいて続けるより今のところ方法が無い。

■行政事務の近代化と組織・機構の改革

さて、お話は町田市が4ヶ町村合併で生れて10年弱が経過し、新設された企画部や企画課が頑張りはじめた頃のことだ。ようやく新しい都市を総合的、長期的に形づくる作業が始った1967年（昭和42年）の春から、1970年までの正味3年余りの出来事だ。その間に企画課が手がけた仕事は数多いが、分りやすく要約すると以下の三点になる。

- ①町田市の長期計画の基本構想「70年プラン」づくり
- ②新しい都市行政の執行体制整備—組織・機構の整備と事務の近代化
- ③新都市のシンボリックな拠点としての新市庁舎建設事業

これらのうち、①の基本構想については既に前号で触れたが、この計画書は小冊子のダイジェスト版・「70年プラン」として、新庁舎の落成式典当日、出席者に配布された。しかし、この直後に青山市長は勇退し、新たに大下勝正氏が市長に当選すると、新市長はこの計画書をお蔵入りさせ、再び陽の目を見ることは無かった。（理由は後述する）

次に②の行政執行体制の整備という話に移ろう。主なものは、公文書の管理システムの導入、市役所の組織・機構の改正と事務事業の部単位の執行体制への補完制度づくりなどである。

●ファイリングシステムの導入—公文書の統一管理と保存

行政事務の近代化というテーマは、当時は、企画することも実施することもすべてが新しい取り組みばかりで、合併誕生したばかりの役所の中には特別に参考となる事例は皆無に近く、先輩職員にもそのような経験者は居なかった。

そんな中で私たちは、これこそ行政事務の近代化に不可欠であり、より構造的で核心的な改革である「ファイリングシステム導入による文書管理制度の改革」に取り組んだ。これは、年輩の古参職員には大変に面倒な改革と映ったようで、一時は悪評の的になったが、三鷹市の改革も持ち出し「この程度の改革が出来なくて、どうして新町田市の近

代化に挑戦すると言えるのか」と総務部庶務課の文書係りの人たちと頑張り、新庁舎完成と同時にシステムを導入するという計画書を創りあげた。

それまで町田市役所は、公用文書は各課ごとに分散管理を行っていた。所謂、大福帳的な手づくりの綴り帳による私的な管理である。だから、どんな文書が、どこに整理保管されているのかが、各課に行かないと分らないという状態だった。役所のすべての仕事の基本となる文書管理が、統一して把握される必要性は、ことさらに説明の必要は無かった。まずは、すべての文書の管理・分類表などを作り上げ、システム設計をしっかりと行って、実施は新庁舎の完成を待つことにした。古い庁舎内には、各課に文書のファイリング・キャビネットを置くスペースはどこにも無かったからである。

●組織の改造 — 5部制から8部制へ—30万都市への準備

町田市の組織改正は、1966年（昭和41年）12月に初めて企画部の新設を含む5部制が敷かれたのは既に述べた。しかし、その後の人口増加のスピードは著しく、3年後の昭和44年には既に18万人に達し、なお1年以内に20万人を見込む状況になっていた。

青山市長は、新庁舎を計画するに当たって、人口増加とそれに対処できる事務処理能力を高める必要性から、事業の増加予測を行い、それを処理するにふさわしい組織・機構のあり方の検討を事務当局に指示していた。

新しい組織機構を考える際、企画課では三鷹市のような事務体制の少数精鋭化と効率化が念頭にあった。しかし、市の現状からすれば、当面は行政処理能力を高めることに集中すべきと判断し、まずは本格的な部制による部単位での業務遂行体制を創ることを優先することになった。そして、組織改正と併せて部単位での体制を補完するシステムを考案して実施することが大切と判断した。この補完システムは、町田市の独創的なものばかりで、当時は上手く成果を挙げたものばかりとは言い難いが、その理念は今日現在でも通用する鮮度を、決して失ってはいないと自負している。

企画課が起案した新組織

1969年（昭和44年）4月1日改正

名称	部の役割	課数	新旧・特徴
企画部	市長の補佐機関・施策の企画調整・予算・広報広聴・秘書	3	
管理部	内部の管理機能・人事・文書・庶務・管財・市民団体の窓口	4	総務⇒管理
税務部	市税の公正な賦課と収納	3	新設
市民部	市民へのサービス・窓口・福利・厚生及び福祉事務所	4	総合窓口課
衛生産業部	市民の日常生活に関する環境及び保健衛生及び産業振興	4	新設
建設部	道路・公園・橋等の整備改良と維持管理業務	3	
都市開発部	都市機能・基盤の整備や地域開発を進める	4	新設
水道部	市民への給水事業	3	
他行政機関	収入役室・教育委員会、議会議務局・選管・監査・農委等		

●『もっと働け部長』補完システム

では、私が鮮度が高いと自負する「補完システム」を、三つほどご紹介しておこう。新しい市役所組織を、その改正意図に添って動かすための運営上の諸規程は、組織・機構改革には付き物だが、当時は、特に「部単位中心で仕事を進める※」という意図を補完するシステムを三つ考案した。これらのシステムは、あれから40年を過ぎた現在でも尚、町田市役所の例規集にいろいろな形で現存していると想定しているが、まずは、①「町田市庁議規定」からご紹介しよう。

これは町田市に限らず、組織中心で仕事をする上での最重要事項である意志伝達と情報流通の機構を整えたことである。ひとことで言えば、役所内部のさまざまな会議を規定化したというもの。制定した当時の表現を使うと、毎週月曜日の朝は「三役会議」を開く。三役とは市長、助役（現副市長）、収入役で、場合に寄れば教育長も含む。火曜日は「首脳部会議」、首脳部とは部長職以上を示し部長は「首脳」と位置づけた。水曜日は部内会議、木曜日は課内会議を定例化することをこの庁議規定で制度化した。つまり、殊更に強調はしていないが、部長は最も重要な首脳部会議に市の「首脳」の一人として政策会議に参画し、同時にトップの命令を次の部内会議で迅速に職員に伝達し、部の職務を誤りの無いように遂行する。さらには各部の各課からあがって来る職員の意見を部内会議で咀嚼してトップに上申することが可能なシステムとした。

※「部単位中心で仕事を進める」ということの真意は、「もっと働け部長」ということに他ならない。

この表現は、当時の企画課が市役所をフル回転させたいと真剣に考えた姿を伝えたいと敢えて使用した。

②部長付き主事制度

部長が部内各課の仕事の現状を掌握して指揮監督するためには、部内情報を整理掌握し、それを使いこなすための専任の補佐役が必要不可欠だが、部内の職員は全員いずれかの課に所属し、部長には直接の部下はいないのが通例である。「部長付き主事」は部長の命を受けて、部単位の部長の仕事、すなわち部内人事、部予算案の編成・整理執行など、部長直々の業務を代行又は補佐する役割をになう職員とした。この制度は当初部長付き主査、つまり係長クラスの職員として原案を作成したが、現実には反対が多く主事でスタートさせた。（詳しくは分らないが、現在は課長クラスの主幹としている？）

③部長の人事権・予算執行権の権限委譲

「部単位中心で仕事を進める」ためには、部長の権限をさらに強くする必要がある。特に、必要職員数の確保は各部長の大きな仕事の一つであるが、毎年の仕事の質・量と職員数の配置は必ずしも適正に行なわれるとは言い難い。そこで、当時の職員配属の市長辞令を部への配属とし、部内各課への職員の配置は、仕事の状況に応じて部長辞令で配属できるようにした。これは議会で定められた範囲内の予算執行についても同様で、大幅な権限委譲が望まれていたことから、限度額の大幅な権限委譲も併せて行った。しかし大変残念ながら、町田市の部長職でこの人事権を駆使して効果的な人事配置の手腕を発揮してみせた部長さんの名を、いまだに私は知らない。（次号に続く）

『エコポイントと生態学』

桜井 朋広

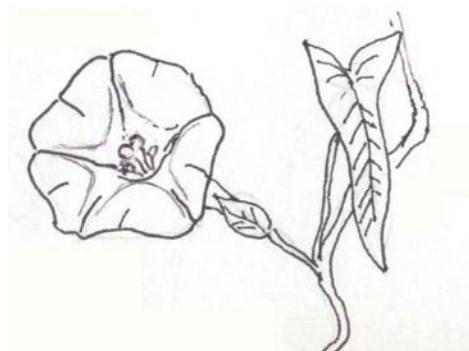
「eco」とは「ecology」を意味する連結形、または通俗的に生態系乃至は環境を意味する、と英和中辞典（旺文社）にある。なぜか世間では「エコ」とは全地球の為に美しく活動する意味かの様な雰囲気がある。生物学としての「ecology」すなわち『生態学』とは、生き物同志の繋がりを調べる為、昆虫を大量採集して黒山を作ったり、動物の糞やら川底の泥を洗って調べたり等、科学の中でも汚れ仕事も多い方なのだが。

ところで「エコポイント制度」は、政府が環境に配慮した買い物を推奨するために始めたという。すなわち旧式家電製品を節電式の最新型や、TVを未だ普及率の低い地上デジタル対応型に買い替えると、代金の一部が旅行券や商品などと引き換え可能なポイントに還元される。又、還元率も一律ではなく高額商品ほど高い。

確かにこれまで環境対策といえれば何かを我慢する等「良いとは思いがやる気には...」と思うものが多かった。その点ポイント制度は得をした気分になれてやり易い。

けれど今回の「エコ」ポイントに感じるのは、本当に環境対策になるかだ。例えば「地デジTV」に買い換えると、未だ使えるTVを廃棄する。全部品が再利用されるので無い限り大量のゴミが発生し、焼却によるCO₂と不燃ゴミによる環境破壊を加速する結果になるのではないか。また、新型家電に限らない環境配慮の家電・商品や活動に「エコアクションポイント」なる制度が別に在るのも妙で、わざわざ新型家電だけを優遇している気がしてくる。

実際は「エコ」ポイント制度は環境対策とは別で、景気対策としての様だ。もし、市民感覚で本当に「eco」と呼べる制度なら、高い新型家電品より、買い換え無しでも節電などに役立つ商品こそ高いポイントを付けて欲しい。消し忘れを防ぐ時限スイッチとか、アナログTVを買い替え無しで見られる変換チューナーとか。国が当てにならないなら、地元限定で使えるポイント制度など、地域でも工夫すれば色々可能に思えるのだが。



ヒルガオ(筆者スケッチ)

事務局だより

定例会のおしらせ

- ・8月の定例会は8月5日(水曜日)です。
中央公民館 学習室(5) 18:00～
- ・9月の定例会は9月2日(水曜日)です。
中央公民館 学習室(3) 18:00～

市制 50 周年記念事業報告書が刊行されました

昨年度、「あなどれません。町田」をキャッチフレーズにさまざまな記念事業がおこなわれました町田市の市制 50 周年ですが、この多岐にわたった企画やイベントの記録を収録した『町田市市制 50 周年記念事業報告書』がまとめられ、このたび市の企画政策課より発行されました。今回のこの報告書は、市制 50 周年とは一体何だったのかを振り返る際に、重要な基礎資料になることでしょう。報告書は市の各種施設で閲覧できるほか、市政情報やまびこにて 800 円で販売しています。

仏国営放送が町田を取材—次号で詳報！

7月28日(火)午前、フランス国営放送の取材クルーが町田市を訪れ、来年春に放送を予定している世界のごみ事情にかんする番組のために、日本を代表して町田の取り組みを取材しました。当市民会議の渋谷事務局長のコーディネートのもと、取材クルーは小山田桜台の大型生ごみ処理機の稼働状況やスーパー三和小山田店でのレジ袋廃止の試み、三輪緑山住宅での家庭での生ごみリサイクルの様子などをカメラにおさめていきました。

この取材の詳細については、次号の特集記事にてご紹介します。どうぞご期待ください。



編集後記

8月になってもはっきりしない天気が続いていますが、ジトジトとした蒸し暑さに負けず、夏を乗りきっていきたいものです。そんな今月は、相原の美大生たちが切り盛りしているお店の話題を特集記事に、事務局長の好評連載と桜井会員の直筆イラスト入りエッセイで紙面づくりをおこないました。



相原では7月4～5日の週末、堺市民センターにて第24回堺市民センター祭りがおこなわれました。当日の会場では華道の実演や地元で創作活動をしている方々の作品展示などがおこなわれ、参加した地元の人たち自身が「[相原には]こんなに人がいたんだ」と驚かれるほど盛況だったということです。



ということで、どうぞ次号の『まちづくりの環』もよろしく願い申し上げます(H. I.)。

まちづくりの環

町田まちづくり市民会議会報
2009年8月3日第72号発行
発行者 佐藤東洋士
編集責任者 井上弘貴
事務局 常盤町桜美林大学内
TEL 042-797-6947